

李禹煥 (リ・ウファン)さん 公開制作@カフェ・レガル

熊本市現代美術館発行

AKL

ART KISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum,

Kumamoto

vol.26



リ・ウファンさんの新作《correspondance》

アン・ハミルトン VOCE 展開催中！

Museum Information

アン・ハミルトン VOCE展がスタートしました。

アメリカを代表する女性アーティスト、アン・ハミルトンの日本の公立美術館初の個展です。本展は、熊本を訪れ、調査を重ねて生み出された新作voce(ヴォーチェ:イタリア語で「声」の意味)。熊本県内の小中学校から集められた木製の71台のテーブル、市民から集められた卓上ランプ、400枚を超える着物、ラジオがビニールシートで包まれ、ラジオの通電音が流れます。そして来場者はテーブルの上の空の世界に立ち、鳥の鳴き声をまねてみるのです。勇気をもって声に出してみると、言葉に置き換えられない思いが伝わっていくことでしょう。

隣接する部屋に足を踏み入れると、回転するスピーカーから流れる蝉の鳴き声、映し出される二つの映像で、ふっと重力を失うような感覚にとらわれます。静と動の二つの空間、無機質なラジオやランプの「音」、蝉や人間の発する「声」が重なり合う五感を呼び覚ます空間を、ぜひご体験ください。(Y.H)

- * 毎週日曜日午後には、鳥の鳴きまねをするパフォーマンスが行われます。
- * 会期中の土・日・祝15:00~15:30には学芸員による解説案内が行われます。

- 開館時間 10:00-20:00 (観覧会入場は午後7時30分まで)
- 開催中~6月4日(日)
- 休館日 火曜日
- 観覧料 一般:1000(800)円 高・大学生:500(400)円 熊本市内小・中学生:無料
(名札・生徒手帳など証明できるものをお持ちください)
熊本市外小・中学生:300(200)円
- * ()内は前売および20名以上の団体料金。
ただし、小・中学生は団体割引のみで前売はありません。

※本展は熊本市現代美術館の単独企画で、他館への巡回はありません。
会期中に当展カタログを発行いたします。(予約可・通販可)



会場風景

アン・ハミルトンさん滞在密着取材!

今回の作品voceは、美術館の展示ボランティアの方々とは4日間にわたり、作り上げていきました。テーブルの上に並べる着物は、一枚一枚折りたたみ直し、そっと手で皺をのばし、敬うように扱ってほしいとの指示のもと、作業を進めました。包むビニールシートも皺を寄せるなど、幾通りもの包み方を試してみました。71台のテーブルを一台ずつ、丁寧に包んで、電気スタンドの明るさを調整すると、静かな緊張感のある空間となりました。

そして、今回の作品の重要な要素となる、鳥の鳴き声を真似する人々の声。練習を重ねたパフォーマンスが会場で初めてその鳴き声を披露すると、「映像の部屋から聞こえる蝉の声が大きすぎないかと心配していたけれど、やっぱり、人の声は力強い」とハミルトンさんも非常に感激した様子でした。(Y.H)



昨夏阿蘇にてヒグラシの声の録音中



ビニールシートでの包み方を考え中のアン・ハミルトンさん



公開制作

李禹煥 (リ・ウファン)さんの公開制作が行われました!

2月5日に、現代美術作家、李禹煥(リ・ウファン)さんの公開制作が行われました。場所は、電車通りからも見える美術館のカフェ壁面。約100名のお客様がじっと見つめる中、約2時間半、集中して描きあげられました。決して大きいわけではない四角形ですが、美術館の空気をふわっと変えてしまう程の存在感。ぜひ皆さんもカフェ・レガでコーヒーを飲みながら、李さんの作品を楽しんでくださいね!(A.S)



鳥のささやきワークショップ

アン・ハミルトン 鳥のささやきワークショップ 2006年2月26日

ハミルトンさんがホームギャラリーで過去の作品を説明した後、20名を超える参加者は、展覧会場内で、鳥の鳴きの上手なパフォーマンスに教えてもらいながら、声を出してみました。他の声を取り、答え、ゆっくりと作品の中に溶け込んでいき、次に訪れた人をいざなう空間へと変わっていきました。(Y.H)

フォト・ダイアリー with アン・ハミルトン



打合せ中(昨年7月)



2/17



2/17



2/18



2/18



開会式2/24



CAMKEESより新館のレイをプレゼント2/24



アーティストの宮島達男さんもオープニングに駆けつけてくれました!2/24

アン・ハミルトン 幼児生活団とのワークショップ/中学生とのワークショップ 2006年2月26日

アン・ハミルトンさんが幼児生活団のみなさん、そして熊本市内の中学生のみなさんと、ワークショップを行ないました。アンさんが丁寧に「voce」展を説明してくれたあと、みんなで鳥の鳴きまねパフォーマンスをしました。(K.K)



アン・ハミルトンさんと幼児生活団のみなさん



アン・ハミルトンさんと中学生

東部児童館・熊本市現代美術館共催ワークショップ

第8回 熊本市現代美術館学芸員・坂本顕子と行く ギャラリー横断!美術館ウルトラクイズ 2006年1月21日

楽しくクイズで遊びながら、美術作品を鑑賞するワークショップ。「よりおもしろいことを言った人が高得点」というポイント制ゲームにはみんな大興奮。全員腹がよじれるほど笑った、楽しい楽しい美術鑑賞ワークショップでした。

第9回 子ども遊便局(あそびんきょく)による「忍者あそびin CAMK」2006年2月4日

ふるしきを頭に巻いたら、もうきみは忍者!道場主を探してお宝を届ける修行や、チームに分かれて敵チームの宝を探す修行など、美術館を舞台に、立派な忍びになるための厳しい修行を積みました。最後は修行修了の巻物をもって大満足。(K.K)



東部児童館のみなさん



忍者あそびin CAMK

記念対談「記憶の声、魂のささやき」 アン・ハミルトン&デヴィッド・エリオット(森美術館館長)対談 2006年2月25日

蜂の声のひびく展覧会場内で行われた対談。会場内は多くの観客の皆様静かな熱気で包まれました。1999年のベニス・ビエンナーレで発表された作品myeinにおけるポリテックな想い、本展の新作voceにこめられた想いなどに触れながら、3時間にわたる講演となりました。エリオット館長の、「この展示室の天井で廻るスピーカーは、アボリジニが使う精霊や遠隔地との交信に使う道具を思わせる」という言葉が印象的でした。この対談の内容は、現在準備中の展覧会カタログに全文掲載されます。お楽しみに!(H.T)



記念対談

CAMKEES展示ボランティア大活躍!!

voce展では、2月17日~20日の4日間にわたり、のべ50名のメンバーが大活躍。机の掃除、移動、マーキングから、着物やランプの設置、ビニールでのラッピングまで、アンさんと一緒に展示をつくりあげました。アン本人も、CAMKEESの働きぶりに大感激の様子でしたよ。(A.S)



CAMKEESのみなさんと

m u s e u m i n f o r m a t i o n

モクモク工房 第24回『スープ皿』

2005年1月12日/26日/2月9日

モクモク工房おもしろ陶芸教室では今回『スープ皿』作りを行いました。深くたっぷり入る皿を作った人もいれば、カラフルな色合いのものを作ったりと、それぞれに自分のお気に入りになる食器作りを楽しみました。(R.Y)

★「モクモク工房」は、各週末曜日の午後2時～5時まで、美術館内キッズファクトリーで開催している陶芸教室です。道具はすべて美術館にありますので気軽に参加することができます!!見学も可能です。ぜひ一度遊びにきてください!



モクモク工房、スープ皿

ハッピー・ホーム CAMKコレクションVol.2
CAMKコレクション・コーポレート
メンバーとゆく「お気軽鑑賞ツアー」
第1回=1月12日 第2回=1月21日

アートが見る見る好きになる!
ミルミル・ワークショップ
第1回=12月23日 第2回=1月15日

CAMKコレクション・コーポレートメンバーによるお気軽鑑賞ツアーは、コーポレートメンバーと来場者が気軽におしゃべりしながら作品を見てまわるツアー。「話しながら見てまわると、一人では気がつかなかったことを発見しますね」「おしゃべりが楽しかった」と大好評でした。

学芸員が来場者と対話形式で作品を鑑賞する「ミルミル・ワークショップ」は、子供向けと大人向け、2回が開催されました。学芸員からも参加者からも、それぞれ思いもよらない感想が次々と飛び出し、美術作品鑑賞の奥深さと楽しさを味わいました。(K.K)



お気軽鑑賞ツアー ミルミル・ワークショップ(子供) ミルミル・ワークショップ(大人)

ハッピー・ファミリー・ツアー/1月14日

CAMKプレママ美術館
「おなかの赤ちゃんと一緒に美術館デビュー」
/2月1日

全国初(?)かもしれない試み、プレママのためのギャラリーツアーが行われました。ほんわかムードのプレママさんたちに、案内するこちらにもっこり。ぜひ元気な赤ちゃんと一緒にまた美術館へ来ていただきたいものです。そして、赤ちゃんが生まれたら、今度はファミリーツアーへ。0歳から6歳までの子どもさんと保護者のためのツアーですが、最年少参加は9ヶ月の赤ちゃん。(なんと最後まで泣かずに見る事ができました!)記念すべき「美術館デビュー」が、楽しい家族の思い出になればうれしいかぎりです。(A.S)



ハッピーファミリーツアー

プレママツアー

ハッピー・ホーム
CAMKコレクション
Vol.2



展覧会カタログ発売中!
(定価600円)

SUITOTTO KUMAMOTO

[スイットット・クマモト]

今年度のスイットット・クマモトは、
当館の展示室GⅢ(ジースリー)での展覧会をご紹介します。

GⅢ.vol.36

井手宣通展 (2006.1.4-2.26)

一人と自然を中心に

ご遺族による作品の寄贈が美術館建設の契機となった、熊本出身の洋画家井手宣通の展覧会を開催いたしました。井手は華やかな色彩で日本の祭や風景を描いたことで知られていますが、今回は画学生時代の人物画、南方派遣時代の画帖、晩年のデッサンなどを含めた作品を紹介しました。伊豆に滞在していた頃の風景画は、穏やかな海を遠くに望んだひっそりとした情景を描いていますが、表現追求のためひたすらキャンバスに向かっていった熱意を感じさせるようでした。

井手の命日でもある2月1日には学芸員によるギャラリートークが行われ、参加者たちは氏を呼びつつ、作品の数々を興味深く鑑賞していました。(A.T)



記念ギャラリーツアーの様子

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ

熊本市現代美術館内に設置しておりますアンケート・ボックスに寄せられました、ご質問・ご意見等にお答えします。

Q. 美術館入口よりまっすぐいった突き当たりに展示室があります、いつも何が開催されているのですか?

A. 熊本市現代美術館の井手宣通(いで・のぶみち)記念室とGⅢ(ジースリー)という2つの展示室は、入場無料で作品鑑賞ができるスペースです。この展示室は、現代美術館のスタッフの企画によって運営されています。

井手宣通記念室は、熊本出身の井手宣通の作品がご遺族より寄贈されたことが美術館設立のきっかけとなったことを記念し開室しております。年4回の展示替えを通して、季節にあわせた作品をお楽しみいただけます。

GⅢ(ジースリー)は、主に熊本・九州出身のアーティストを紹介する展示室です。展覧会にあわせて講演会やワークショップも開催されます。詳しくは年間スケジュール、展覧会チラシをご覧ください。3月29日から、熊本で活躍するデザインユニットnaonao's(ナオナオズ)の展覧会を予定しています。

* 美術館内の施設では、アートロフトと会議研修室がレンタルで使用できます。(要予約)

●施設使用料
アートロフト(多目的ホール)/2,850円(1時間、空調料金込み)・会議研究室/850円(1時間)
※マイク、液晶プロジェクターなど機器ごとに使用料がかかります。詳しくはお問い合わせください。



GⅢ 沢田知朗展



井手宣通記念室



熱血展 トイロノセカイ

2006.1.17-1.31 プライベート・ロッジ
熊本市上林町3-33-2F TEL323-3551

ピカソ、バルデス、ボナール。会場に入ると懐かしい巨匠達の名前が浮かんでくる。東城大学芸術学部洋画コース3年のイマムラナミ、AYUKO TANOUÉ、あさだまりえ、佐藤友美さんによる4人展「熱血展」。幼いエロスを感じさせるイマムラさんのタブロー「ふたりあそび」、AYUKOさんの端正なコラージュ「一つの街の複数の表情」、あたたかな空気に満たさそうさんの「幸せな部屋」、キュービクな表現に正面から取り組んだあさださんの「白いカブ」など、それぞれ過去の作品から学び取るという素直な姿勢が好意を呼ぶ。今回は、○風を打ち破り、新たなスタートへ。ますます熱血する作品を生み出してほしい。(A.S.)



アニマル会館動物教室展

第33回アニマル会館動物教室展

2006.3.1-3.6 アートスペース大室堂
熊本市上通5-6 TEL354-2155

山崎才哉さんの動物教室に通う生徒さんの作品展。毎年1回ずつ開催し、今年で33回を迎える。ユニークな教室名の通り、教室では動物の名前でお互い呼び合うそうだ。小学校低学年までは工作を中心に公民館などで週一回程度、高学年以上は希望によって山崎さんのご自宅で油絵を習っている。3歳児の作品から高校生の作品、あるいは保護者の方あわせて33名の作品が集まった。砂絵、銅版、紙粘土、水彩画、油絵など、子どもの好きな作品をということ、画材も様々。マカロンやクリップ、モール、ビーズ、ビーズ、おはじきやお弁当についている飾り、あるいは、おもちゃの指輪などの宝飾品まで作品になっている。パネルにこれらのものを自由に貼り付け、色付けまでも、身近な素材が見事にアート作品になっている。独創的な色彩を持つ子どもたちの作品から、風景や静物などを描いた油絵まで、これから大人へと成長していく伸びやかな子どもたちの姿が想像される展覧会であった。(N.I.)

中村天香書作展

2006.1.24-1.29 県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

白鷗書道会を主催する中村天香さんは、卒考記念・県芸術功労者顕彰を受けて、書道個展を県立美術館分館で開いた。
中村さんは、夫・蘭石さんのあとを継ぎ、後進の指導に当り、日展27回の入選をなし、読書書法展や女流書法展の役員も務めている。展示された作品は、かなとかな系の調和体書を軸と軸などにして80点を見せつけた。関戸本和漢朗詠集・本阿弥切古今集・秋萩帖・高野切一様・寸松庵色紙など、かなの代表的な古典の臨書作品から、万葉集の歌と百人一首のかかる約300枚など大作から小品まで多彩であった。特に万葉集の鶴の歌を六曲一巻(ろっきよきいっそう)にした大字かなは圧巻である。
花をテーマにした万葉集歌39首を扇面に書いた六曲扇風(びょうふう)の大作や貝合わせ等は、実に繊細で多様である。中村さんは「80歳の節目に初心にかえり精進を続けていきたいとの昨年一年間でのこの作品である」と話していた。80歳にしてこれだけの仕事をされたその努力にはただただ頭が下がる思いであった。(S.K.)

第25回卒展(尚綱大学書道コース)

2006.2.7-2.12 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

尚綱大学文学部国文学科書道コースの第10期生13名が、大学4年間の集大成としての卒業制作展である。
3名が各4点を出品し、あとの10名が各3点を出品していたので、卒業制作は計42点であった。内容は、仮名細字(小字)の古典臨書や仮名の創作、漢字の古典臨書や、甲骨文もふくめて各書体にかた-ア小字から多量文字での理解の創作、非文字(非文字)の創作や、その表現形式や作品の大きさ、装具の体積なども含めて進化を持たせようとする努力がうかがえる。
初めての試みとして、「さくらからのイメージ」を共通テーマとして取り組んだことで創作意欲が盛り上がり、チームワークもバツリとかが。
大学の専門課程として書道を学んでいるので環境には恵まれている連中である。注目すべき快作も、思い切りのいい大作も見られて、若者らしい楽しい書道展であった。
なお、専任教員4名、非常勤講師5名の賛助作品も会場の雰囲気をも盛り上げていた。(T.M.)



第2回熊本ろう学校美術展

第2回 熊本ろう学校美術展

2006.1.17-22 熊本県立美術館分館(展示室2)
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

昨年に引き続き開催された熊本ろう学校美術展。今年は幼児・児童・生徒の作品だけでなく、卒業生や職員の方々の作品も展示された賑やかな展覧会となった。手作りの顔に納められた表情豊かな動物たちの絵、みんなで一緒に作り上げたモザイクの作品、れんがの一枚一枚まで細かく彫られた版画など、明るく力強い光を放つ作品の数々に圧倒された。ひととき目を引いたのが、入口近くに展示されていた幼椎部によるたくさんの動物を模った作品で、色とりどりの動物たちが所狭しと並べられ、動物たちの鳴き声や子どもたちの歓声までが聞こえてくるようだった。「子どもたちの制作を間近に見ていて常識に捕まれない造形が現れるたびに、いつもはっとさせられます」と語る北本先生の笑顔がとても印象的だった。(E.Z.)



【アート・ド・キャン】
熊本市で「アート・どう?」の展です。



「ディティコ展 アジアの布市場」

2006.2.21-2.26 熊本県伝統工芸館
熊本市千歳町3-35 TEL324-4930

お茶とウコンで染めたヒマラヤのシルク服を素敵に着こなした松永望希さん。彼女は30年前、ネパールの山登りをきっかけに現地の旅行会社に勤めながら旅を続けていた。その時、山ひとつ越えたと文化や民族衣装が変わるおもしろさに惹かれ、山を歩いた思い出とともに彼女は多くの布をコレクションしていった。また集めた布を独自の裁縫技術でオリジナルの身に纏うことのできる服として蘇らせた。インドネシア・タイ・ラオス・ベトナム・カンボジア・ミャンマー・インド・ネパールなど現在も現地に直接仕入れをするスタイルを続け、今回の展示に合わせて100着縫った作品とともにアジアの貴重な織り・染め布、装飾品を楽しむことができた。尾ノ上に店があり(Tel096-384-5015)いつでもその布や作品をみることができ、彼女の現地の話とともにその美しい布を広げると、民族生活のぬくもりを身近に感じることができ、神秘的な体験ができる。(R.Y.)



水彩画連盟熊本支部展

第28回水彩連盟熊本支部展

2006.2.7-2.12 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

水彩という同じ絵の具を使いながらも、それぞれの題材、技法の違いによって、多彩な表現の作品が並んでいた。なかでも堤啓一さんの「三池港」では、じっくりと丁寧に塗り重ねられた色彩が、時の傍観者である構造物を静かに深く描いていた。熊谷博恵さんの「花を待つ頃」では、画面の大半を占める地面と歩く人、その影という動きのある構図のなかで、軽やかな色使いによって、新たな力が湧き上がるような大地を温かく捉えていた。(Y.H.)



第23回具象展

第23回具象展

2006.2.14-2.19 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

熊本在住で、日展・日洋展を軸として制作活動を行っている洋画家、33名によるグループ展。多くは100号サイズの力作が出品されており、それぞれの研鑽の成果を発表していた。村松康雄さんの「岬と雲」は晴天の日の輝き、輝きと雲の間に真白な雲が浮かんでいる様子が描かれ、海風のさわやかな印象を受けた。斎田正孝さんの「帰郷」は冬のふきさらしの荒野の上空に渡り鳥が群をなして飛んでいる様子が描かれる。こちらは北風の厳しさを感じさせた。ともに季節感と広大な景色の印象を活き活きと伝える作品である。(H.T.)

お知らせ



さる2月22日、小説家の福島次郎さんがご逝去されました。少女小説「花ものがたり」を美術館プロデュースで出版するきっかけとなったのは、平成13年の本紙でのインタビューでした。はじめて訪問したときの福島さんのお家は、うす紫の蔭のさかりで、本当にすてきでした。昨年アートパレードでの講演をお願いした時は、チューリップや水仙の球根が植えられたばかりで、春を待つ準備は万端でした。いま、あのお家は、春の花が咲き誇っていることでしょう。
花を愛した福島次郎さんならではの、花と乙女の話が12話。熊本の景色と四季の花をテーマに、乙女のこころの機微を描いた「花ものがたり」、ぜひ一読ください。
定価2000円、熊本市現代美術館にて販売しております(1,000部限定)。通信販売可(送料別、現金書留での前払)。



展示風景

熊本大学教育学部美術科卒業・修了制作展

2006.2.28-3.5 熊本県立美術館分館
熊本市千歳町2-18 TEL351-8411

6名の卒業生、5名の修了生による絵画・彫刻・デザイン作品が展示されていた。しなやかな動きと風感を追求した全身像、心の奥のほの暗い記憶を思わせる丸山詩加さんの3作品、きらきらと揺れる木漏れ日を色鉛筆とコーヒーで描いた福永真二さんの「Look down to the SKY」、赤・黄・青の光の多様な軌跡を鮮やかに写した相川真由美さんのデザインの作品など学生たちの熱心な制作態度が伺える力作が並んでいた。
絵画作品の中には半球状のものに顔が描かれている作品や、面に空を垣間見た箱が床に設置されているなど、平面という枠を越え新たな可能性を見出そうとする意欲を垣間見ることができた。(A.T.)



熊本市現代美術館2003年度の活動報告書であるArt Gamadas(アート・ガマダス)第3号を発行いたしました。収録展覧会は「八谷和彦 オープンスカイ」、「岡本太郎 絶対の孤独」、「CAMK流 現代「日本画」の精華」、「熊本アートパレード 第15回熊本市市民美術展」、「マリナ・アブラモヴィッチ「ザ・スター」、「斎藤義重展」、またギャラリーIIでのvol.3-12までの展覧会、講演会、イベントなどをすべて記録した一冊です。その時に立ち会うことのできなかった方々も読み物として楽しんでいただけるよう作成いたしました。総数684ページ(うちカラー32ページ)。税込2300円。限定200部を美術館受付で販売しています。通信販売可(送料別、現金書留での前払)。

詳しくは096-278-7500までお問い合わせ下さい。



ART KISS LETTER
FOR KUMAMOTO ART PEOPLE
Contemporary Art Museum, Kumamoto
vol.26

執筆者一覧
*ギャラリー-取材原稿の文庫にイニシャルにて記載しております。

兼松昌山 Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草 Tanso Moriyama (書道家)

本田た志子 Yoshiko Honda (熊本市現代美術館学芸員)
藤原江美 Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
金澤蘭 Kodama Kanazawa (熊本市現代美術館学芸員)
高澤治子 Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
坂本順子 Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
山宮りさ Risa Yamamoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
竹田西 Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆菜々 Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

編集後記

今年も桜の季節となりました。彼らはどんなに冬がきびしくとも、この時期に咲いてきてくれます。でも、その到来は彼らが命をかけて、また来るからという、その約束を守ろうとする現われであることを忘れてはなりません。現代美術館が出来たときに、私たちが皆さんに約束した、そのひとつひとつが本当に果たされてきたかどうか、桜の命がけの美しさに問われているような、ちょっと感傷的な今日この頃です。なお、次号から当初から「AKL」を担当してきた学芸員の富澤治子さんが編集長となります。これからは変わらぬご支援をお願い申し上げます。

編集長 南富宏